第七講《小説その３》母親と子供の関係（継母と娘）

次の文章は、幸田文の小説『おとうと』の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

げんと碧郎らは割合上機嫌に夏休みの一日一日を過ごしていたが、母はずっと憂鬱にあまりいい顔はしていなかった。一ツにはレウマチの悪化もあったが、碧郎への態度のとりかたについて父と意見の合わないことも、憂鬱の大きな原因らしく察せられた。だから、ときに碧郎が屈託なくはしゃいで大笑いしたりすると、(A)げんは母をはばかってびっくりとする。その点碧郎は何の心遣いもないのんき坊主だった。そんなある日、母への訪問客があった。ご信仰の友達で、古くからの交際である。母がこの家へ後妻に来る以前からのつきあいがずっと続いているのだが、金のある家庭に円満な生活をしている、いわゆるいい奥さまである。美貌で身なりがよくて、強い意見というものを有たず、優しい人なのだが、交際が好きである。年配は母とほぼ同年齢だった。そういう見た眼にも明るい人が訪ねて来てくれたことは、家の中じゅうへ光がはいってきたようなもので、憂鬱な母もいそいそと迎え、げんも嬉しかった。母は久しぶりに楽しげであり、客はやや長く話しこんでいて、帰りにげんにも愛敬よく挨拶して行った。げんは何一つ不愉快を予想していなかった。

それが、客を門まで送りだして座敷へあがると、母の顔はこわらしいものに引っ吊れていた。そして、「ちょっと話したいことがあってよ」と呼ばれた。

弟のことだと思った。が、意外だった。「あなたいつか、銀座で田沼さんの奥さまに逢ったっていったわね。」

「ええ」と答えるものの何事だか見当はつかない。

「そのとき、いい加減長々とお話していたんでしょ？　私、ただ逢ったという単純なことだとばかり思いこんでいたけど、そういうの、私のばかかしらん。私はあなたがうそをつくとは思ってもいなかったんだけど、私みたいにばか正直なのもつくづくよしあしね。」母はよほどおこっているらしく、眼つきが許すまじという色を見せて、(B)いいかたがいやにねじれていた。圧されつつ、げんはわからない。そんなことをいわれる覚えはなかった。

「そのときのこと覚えている？」

「ええ。」

「それならよく考えて、どういう会話をしたか、ありのままに私にも一度いってごらんなさい。」

げんは素早くそのときのことを思いうかべて検べるけれど、合点が行かない。「私なんかいけないことといったんですか。」

「――素直にいってごらんっていえば！　いったんですかなんて訊かれたって、私が訊いていた当人じゃないもの。」

げんは恐れてだまっていた。母が待ちきれずにいいだした。「あのとき、私が万年筆の具合が悪くなったから丸善へ持って行って修繕して来て頂戴って頼んだんだったわね。」

「ええ、そうだったわ。」

「田沼さんの奥さまにあんた、お父さんの万年筆でなくて母さんのだ、母さんのだと幾度もいったんじゃない！　母さんのわざわざ学校の帰りにお使いにやらされるんだっていったでしょ！　こんなお使いしていれば、通学距離が遠いところへもってきて手間が取れるから、うちへ帰るの日が暮れるって嘆かなかった？」

　これはだめだ、とてもいい解くことはできないと思われた。なぜなら、母にいわれていることは全部見当違いなことなのだけれど、しかしそのなかに使われていることばは一ツ一ツ思いあたる影をもっていた。たしかに会話のなかに母の万年筆ということばもあり、帰りが遅くなる云々もあった。が、大切なことが間違われていた。会話は二人のするものであって、一人でするものじゃない。問われて答えたことが一緒くたにされて悪意な解釈をされてしまっている場合は、はなはだいい解きにくいだろう。母はいうだけいうとじっとげんを見つめて、意識して無言になった。いい解こうとする気を起こさせないほど母の怒りが現れていた。絶望の空気が漂った。だが、げんは一しょう懸命にそれからそれと考えた。第一に、なぜあの奥さまはそんなへんなことを母へいうのだろうということだった。第二に、母があの奥さまの話を悪く取ってしまったのではないかという疑いである。第三に、あの夫人の微笑である。美貌の微笑が憎らしくおもえた。あのときも他意なく親しく優しく、げんのお使いをすることをねぎらい、ほほえんでさよならをした、たったいまも門のところでげんに笑いかけて別れて行った、――あの微笑の優しさのどこにげんを（注）誣いるものが隠されているんだろう。ふしぎであった。

　母は無言くらべをしているようなげんにたまらなくなる。「どうして何もいわないの？　いえないんじゃない？　……私はね、あなたがまさか陰でそんないやなことといってると信じたくないのよ。だけど、あんたがそんなふうにへんな陰口きかないじゃい

られないなら、それもそれでしかたがないと思うの。正直にいって頂戴。田沼さんの奥さまに訴えるくらいなら、なぜ私にじかにいわないの。私あんたにいい加減に扱われていたと思うと、情ないし腹がたってたまらない。どうなのよ、返辞なさいよ。」

母は涙をはらはらとこぼした。げんは母は悪くないと感じた。気の毒な気がした。「母さん、あのおばさまにだまされてるんじゃない？　何て聞かされたのか知らないけど、あのおばさまがへんなんじゃないかしら。」

それはほんとうにげんの思ったままをいったことばだった。が、母はあっけにとられたというようすをし、いうべきことばがないといった表情でげんを見た。「まあ、あんたって人はまあ。……よくもそんな、田沼さんの奥さまはそんなかたじゃないわ、そんなだますなんて――だまして一体誰（だれ）が何の得になるのよ。」

「じゃあ、母さんはあのおばさまのいうことを全部信用してるのね。」

C<u>母はぐっと詰まった。</u>眼だけが躍起になっていて、口はだまって返辞をしなかった。げんはそれを見ていて、むかむかっとむちゃくちゃになった。「母さんは、あたしを信用していないのね、いいわ。田沼さんのおばさまはそんな人じゃないって母さんは私にいうけど、田沼さんのおばさまにもげんはそんな子じゃないっていってもらいたいわ。あたし、母さんにある程度は信用してもらってると思ってた！」

おしまいのほうは涙声になった。母は眼ばかりの顔をつと横へそらした。「あたし、いわない。いわなかったわ。田沼さんのおばさまはあのとき、どこへ行くの？　お父さんの万年筆ですかと訊いたわ。あたし、返辞しただけだわ。これから丸善へ行って帰るんじゃ遅くなるだろうとか、いつもお使いするのか、よくいうこと聴くのね、うちの栄子はしてくれたことないとかいったわ。……母さんがなんと思ったって、あの人とあのとき話したのあたしなんですもの。あたしはあのおばさま、なんて意地の悪いうそつきなんだろうとはっきりわかったわ。」げんは興奮でがたがた顫（ふる）えていた。

「――ああ、後悔してくれるかと思えば逆に噛（か）みつくのね、あんたは。」母は田沼夫人のいうことをまったく信じこんでい、げんにちっとも信用をもっていないのである。げんは母へぐうっと不快を募らせた。

「あんたもそんなふうに私を睨（にら）んでどうするの？　……碧郎さんといいあんたといい――あたしもどうしていいかわからない！」

どうしていいかわからないと悲しげにいわれて、D<u>げんはふわっと母の悲嘆のなかへ惹（ひ）きいれられた。</u>母とやりあうとき、い

つでもげんは母を疎ましく憎らしく思う感情と、気の毒に申しわけなく思う感情と、相反する二ツの感情の両方へあちこち引っ張りまわされて、しまいにはもうどうでもいいから、とにかく早くその場が済むようにと思うのである。母もげんもどちらからともなく立ってしまった。いずれ母は例によって自室で祈りがはじまるのだろう、げんは台所よりほか居どころはない。

（注）○誣いる――事実をまげて人を悪くいうこと。

問１　傍線部Ａ「げんは母をはばかってびっくりとする。」とあるが、ここでのげんの気持ちの説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① 母の憂鬱な様子に気づかず、ひとりではしゃいでいる碧郎の無神経さに、驚きあきれている。
② 碧郎の明るい笑い声によって、かえって暗く沈んで行く母の屈折した心理を危ぶんでいる。
③ 神経質な母のひどく不機嫌な様子に遠慮して、弟の笑い声にもびっくりするほどおびえている。
④ 母の憂鬱の原因を察するにつけ、弟ののんきな笑い声が母を刺激することをおそれている。
⑤ 常に憂鬱な母にひきくらべ、自分たちだけが楽しそうにすることに、うしろめたさを感じている。

問２　傍線部Ｂ「いいかたがいやにねじれていた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

① まったく筋の通らないことを言った。
② 事実をひどくねじ曲げた言い方をした。
③ 非常にいじけたようなことばづかいをした。
④ ひねくれて訳の分からないことを言った。
⑤ ひどく皮肉のこもった言い方をした。

問３　傍線部Ｃ「母はぐっと詰まった。」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　母の涙にもたじろがずげんが思いがけず田沼夫人の批判をし、わが子としてはふさわしくないことばまで口にするのを聞いて、驚きと悲しみに襲われたから。

②　言いたいことはだれよりもまず自分に話せと言いながらも、結局は友人のことばだけを重んじてしまっていることを、げんの一言によって鋭く指摘されたから。

③　茫然（ぼうぜん）とした心理状態の虚を突いて出て来たげんのことばにより、それまで自分の信じ込んできた事が激しく揺さぶられ、不安が一度に胸に広がるのを感じたから。

④　もともと神経質な母は先刻来の口論にだんだんと気持ちが不安定となっていたが、年来の信仰の友とたのむ人をげんになじられ、その動揺が極度に達したから。

⑤　感情的な母親と冷静な子供との間では議論の帰結は明らかで、無言だったげんが発言し始めると、母の追及のことばはたちまちその論理の矛盾をあらわしたから。

問４　傍線部Ｄ「げんはふわっと母の悲嘆のなかへ惹きいれられた。」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選べ。

①　ふだんからの行き違いもあり、感情の赴くままに激しく言い争ってしまった母ではあったが、その深く悲しげな様子に、我知らず母への同情の思いがわき出てきたということ。

②　友達のことばのみを信用し自分をまるで眼中に置いてくれない母のやり方に、顫えるほど興奮し怒ったが、争いの後の反動として母の悲嘆への謝罪に似た思いに駆られたということ。

③　弟を間にした反目もあり、不快の念は強烈であったが、口論の後の母の悲しげな姿に、後妻として自分と弟の世話をしてくれているその人への和解の心が生まれたということ。

④　いさかいのために出会ったような二人ではあったが、その母への相反する二つの感情のうち、このときは自己の意志に反するように母を気の毒に思う感情が勝ってしまったということ。

⑤　母の流した涙に本当は母は悪くないのだと信じながらも行き掛かり上激しく抗弁したが、それに当惑した母への哀れみの思いが無意識のうちに復活してきたということ。

第七講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●筆者　幸田文＝こうだ　あや（一九〇四〜一九九〇）東京生まれ、文豪、幸田露伴の次女。代表作は本作の『おとうと』のほか『父　その死』『きもの』『みそっかす』など

●幸田露伴＝こうだ　ろはん（一八六七〜一九四七）東京生まれ、東京英学校（今の青山学院大）中退。筆者の父。本文中にも「父」として登場。明治の文豪のひとりで、文学結社「硯友社（けんゆうしゃ）」の尾崎紅葉とも親交があった。代表作『五重塔』『風流仏（ふうりゅうぶつ）』

●青木玉＝あおき　たま（一九二九〜）東京生まれ、東京女子大国語科卒。今回の文章には登場しませんが、筆者の娘で作家。テレビ朝日の「徹子の部屋」にも出演。代表作『小石川の家』

語句

屈託ない＝くったくない→こだわりや心配がない・無邪気
　cf屈託する→物事にあきている・することがなくいやになる
はばかる＝憚る→「～をはばかる」で、つつしむ・遠慮するの意味。幅をきかせる・のさばるの意味もある
　例「憎まれっ子、世にはばかる」
後妻＝ごさい→妻と死別あるいは離婚した後、結婚した妻。のちぞえ
愛敬＝あいきょう→にこやかで親しみやすさ、かわいらしさがある。「愛嬌」とも書く
こわらしい＝強らしい→こわばってかたい
合点＝がてん→同意、納得すること。得心が行く
他意＝たい→心中にかくされた別の意図・悪意
あっけにとられる→意外さに驚きあきれる
躍起＝やっき→あせってむきになる
皮肉＝ひにく→表面上のことば使いに反し、真意は相手への悪口。遠回しの批判・あてこすり・アイロニー・イロニー
抗弁＝こうべん→反論

復習問題　第七講

次の傍線部にあたる漢字を、次の選択肢から選びなさい。

（ア）あの奥様は交サイが好きな方だ　①催　②際　③祭　④栽　⑤再

（イ）気持ちのいいアイ拶を交わす　①逢　②合　③相　④愛　⑤挨

（ウ）帰り道のキョ離が遠くなる　①炬　②拒　③距　④据　⑤居

（エ）いい加ゲンに扱われると腹が立つ　①源　②減　③元　④厳　⑤眩

（オ）相手の態度に興フンしてしまう　①奮　②憤　③噴　④紛　⑤粉

次の語句の意味として最も適当なものを、次の選択肢から選びなさい。

（カ）屈託ない

①苦労をしらない　②話を聞かない　③無邪気である

④信用できない　⑤融通がきかない

（キ）他意なく

①あっけない　②自己本位な　③遠慮がない

④裏の意図はない　⑤幼く弱い

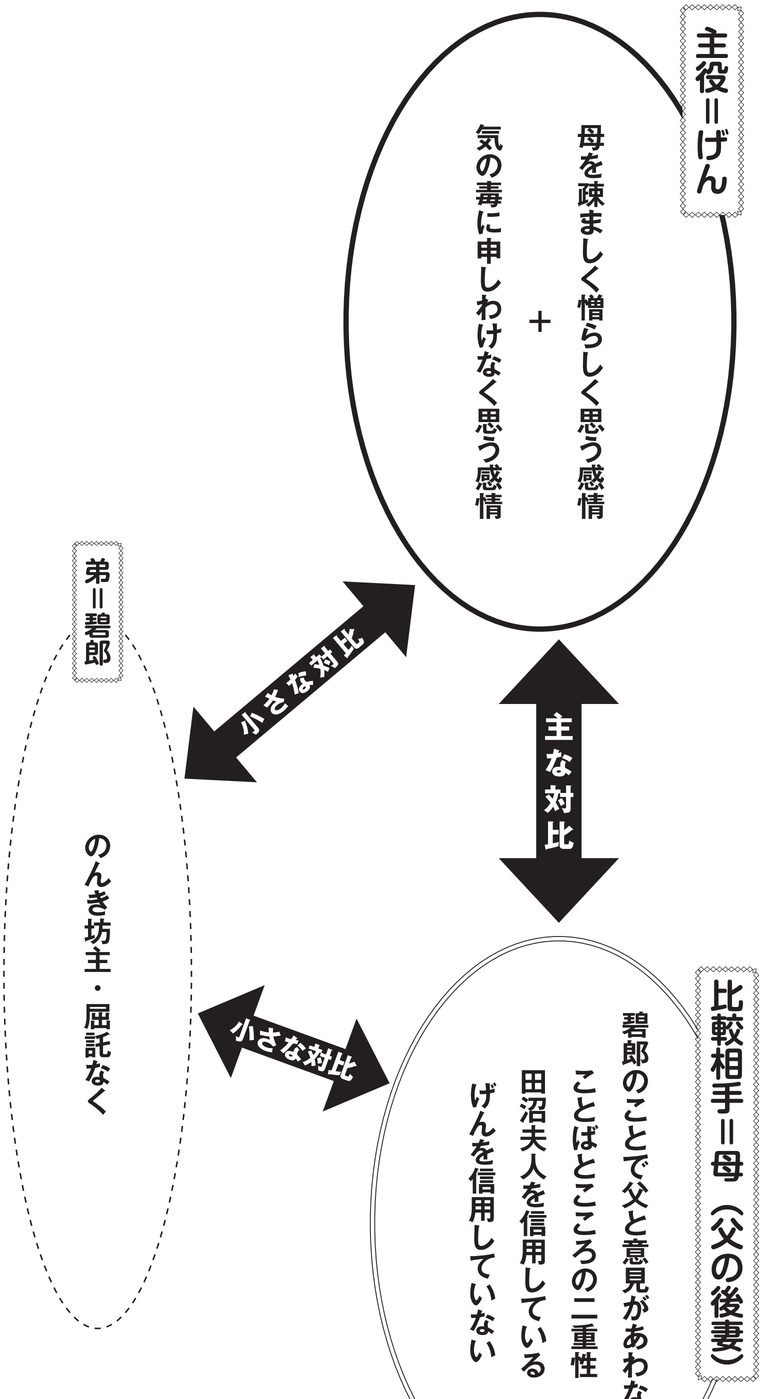
（ク）躍起になる

①自暴自棄になる　②むきになる　③元気になる

④相手を見下す　⑤挑発的になる

第七講　《小説その３》　母親と子供の関係（継母と娘）

《本文の対比構造》



《解説》

問１《傍線部説明・選択肢》

げんは、母の「憂鬱の大きな原因」が「碧郎への態度のとりかたについて父（文豪の幸田露伴です）と意見の合わないこと」と推測しています。「おとうと」の碧郎クンに比べて、お姉さんであるぶん、お母さんに対しても気を遣っています。それが傍線の「母をはばかって」です。一方、碧郎クン自身は、まったくの子どもで「屈託なく」「のんき坊主」です。「何の心遣いもない」のも悪意ではなく、年端もいかないからでしょう。つまり、無邪気・イノセントなものということですよ。したがって、④が正解です。①は「碧郎の無神経さ」が×です。碧郎の行動を悪く表現しています。記述に反する誤りです。②は「明るい⟷暗く」が正しい対比喪失の誤りです。このようなキャラクター分類はありません。碧郎は〝明るいキャラ〟ではなく「のんき坊主」、つまり子どもなのです。母も〝暗いキャラ〟ではなく「憂鬱」になる理由があるわけですから。そうした理由・原因があるからこそ「母をはばかって」いるのです。すると、母の心理そのものを心配しちゃってる「母の屈折した心理を危ぶんでいる」は×です。心理カウンセラーに相談しようかな、という話になってしまいます。記述に反する誤りです。③の「神経質な母」も似たような間違いです。つまり、憂鬱の理由・原因関係なく、母親そのもののキャラにしてしまいました。記述に反する誤りです。⑤は「常に」が不当な全称判断ですね。

問２《傍線部説明・選択肢》

表現の二重性についての問です。表面上、発言上は「私のばかかしらん」「私みたいにばか正直なのもつくづくよしあしね」なんて自分を責めているように見えて、その実、「よほどおこっている」らしいのです。「眼つきが許すまじという色を見せて」なんて、目に本音が出てます。さらに顔も「こわらしいものに引っ吊れていた」とありますからね。ホント怖いです。般若（はんにゃ）の形相（ぎょうそう）というヤツでしょうか（私の妻もときどきそういう顔をして、夫をふるえあがらせています）。こうした表現上のうらおもてをなんて言いますか。〝あら、奥さま、その春物のワンピース、ステキですわね（本音は、なに若づくりしてんのよ）〟みたいな二重性です。そう、皮肉・いやみ・アイロニーです。⑤が正解です。こういう皮肉って、かえってグサっと心に刺さりますよね。心にもないのに〝できるひとはちがうよねー〟と言われるくらいなら〝オマエ、アホやな〟と言われたほうがいいくらいで

すよね。③の「いじけた」は表面だけです。つまり、部分的指摘の誤りです。他の選択肢はすべて、この二重性を表現していないので、記述に反する誤りあるいは、表面と内面の正しい対比喪失とも言える、ということになります。

問３《傍線部説明・選択肢》

母は、「ありのままに私にも一度いってごらんなさい」「素直にいってごらん」「正直にいって頂戴」「私にじかにいわないの」と繰り返してます（四つとも表現を巧みに換えているところは、さすが作家の妻！）。ところが、げんが「ほんとうにげんの思ったままをいった」のに、「信用」しません。田沼の奥さまの言葉だけ「全部信用」している。そこを指摘されて「ぐっと詰まった」わけですから、②が正解です。①は、「わが子としてはふさわしくないことば」が×です。そうしたふさわしさのある⟷なしは比較になっていません。正しい対比喪失の誤りです。③は、まず「茫然とした心理状態の虚を突いて出て来たげんのことば」が×です。ボーっとしてたら、突然、言葉をかけられてうろたえているみたい。〝もう、この子ったら、話す前に話すよっていってよ〟ということでしょうか（話す前に話すってムリだけど）。実際には、ずっと言葉のやり取りが続いていたわけですから、記述に反する誤りです。さらに、「それまで自分の信じ込んできた事が激しく揺さぶられ」が×です。友達の方だけ「信用」し、げんのいうことは「信用」してないわけですから、そこは少しも揺らいでいません。記述に反する誤りです。④は「もともと神経質な母」が×です。すでに問１でも指摘したように、記述に反する誤りです。こうして、同じような間違いが繰り返し登場したりするのも、大学受験の現代文の特徴ですよ。本番で見たら、ただちに×です。解答時間の節約になるよね。⑤は「感情的な母親と冷静な子供」が、絵に描いたように典型的な正しい対比喪失の誤りです。二人とも十分に「感情的」です。その点は、比較・対比ではないのです。たとえば、げんが「だまっていた」のは「冷静」だからではなく「恐れて」です。その後も、母に同情したり、「むかむかっとむちゃくちゃ」になったり、感情に振り回されるようすが克明に描かれていますよ。

問４《傍線部説明・選択肢》

問３にも書きましたが、げんは、そのときどきの母親への感情の変化に振り回されます。「母は悪くないと感じ」たり、「むかむかっとむちゃくちゃになった」り、「母へぐうっと不快を募らせた」りします。「母を疎ましく憎らしく思う感情」と「気の毒

に申しわけなく思う感情」に「あちこち引っ張りまわされて」います。傍線部では、「ふわっと」つまり一時的に母への同情になっています。したがって、①が正解です。「我知らず〜わき出てきた」が、その一時的気分をよく表現していますよ。②は「争いの後の反動として」がいけません。これじゃ物理的スリカエの誤りです。人の心は、ピンボールやビリヤードの球ではないのですから。右に行ったら次は跳ね返ってかならず左ということではありません。「不快を募らせ」ることもあるのです。③は「和解」が×です。これでは一時的な気分ではなく、かなり永続的なものになってしまいます。記述に反する誤りです。④は「いさかいのために出会ったような二人ではあった」が笑えます。ハブとマングースかよ！（もっともそれは人間がショーとしてやらせているだけだけど）ともあれ、不倶戴天（ふぐたいてん）の敵という感じですかね（共にはこの世に生きて行かれない）。さらに、「自己の意志に反するように母を気の毒に思う感情が勝って」も×です。一本筋の通った固定的「意志」と一時的「感情」を勝手に比べていますが、こんな対比は本文にはありません。正しい対比喪失の誤りです。⑤は「母への哀れみの思いが無意識のうちに復活」が×です。これではベース・基本・基準にあるのは母への同情ということになってしまいます。反感であれ、同情であれ、そのときどきのもので、いずれもベースではありません。記述に反する誤りです。

模範解答
問１＝④　問２＝⑤　問３＝②　問４＝①

復習問題　解答　第七講

（ア）②　（イ）⑤　（ウ）③　（エ）②　（オ）①
（カ）③　（キ）④　（ク）②

解答漢字一覧

（ア）交際　（イ）挨拶　（ウ）距離　（エ）加減　（オ）興奮